

合田大介の『紅毛醫述聞書』の概要

板野 俊文

香川大学

江戸中期の讃岐の医家であった合田大介の著した『紅毛醫術聞書』と吉雄流外科について述べる。

まず、合田大介の略歴について解説する。大介は元文三年（一七三八）に讃岐の国和田浜に生まれた。諱を久敬、又は善興、号は蘭齋、通称を大介という。合田傅右衛門の三男で、長兄は合田強（通称求吾）。兄の勧めで宝暦五年十八歳の時、長崎に行き、阿蘭陀大通詞である耕牛吉雄永章（一七二四～一八〇〇）と、その弟の蘆風吉雄永純（一七二五～一七七七）に紅毛外科を二年間学び、讃岐に戻った。その時の講義録を自分なりにまとめたものが『紅毛醫述聞書』であろう。しかし、兄は「学未だ成らざる」としてさらに数度長崎遊学をさせた。大介は若くして外国語を学んだことから、オランダ語の読み書きが堪能で、蘆風が死ぬ前の遺言で遣り残した外科本の翻訳を大介に依頼したという逸話がある。寛政七年（一七九五）三月 死亡 五十八才。

合田大介の業績は長与健夫の論文が嚆矢で、『紅毛醫術聞書』の一部を翻刻し、合田大介の「カンケル論」として述べられている。また、この仕事は、その後に永富独嘯庵を通じて、華岡青洲の乳癌の外科手術に影響を与えたとされる。しかし、この著作の全体の報告はされていない。

一方、吉雄耕牛や蘆風はその業績をほとんど出版しなかった。現在、吉雄流の水薬、油薬、膏薬の処方は全国各地に写本として残っているが、これらからは吉雄流外科の全体像をつかむことは困難である。当時の吉雄家の阿蘭陀流外科が、どのようなものであるかを知ることは重要であると考えられる。

本書では約十五の病気をあげ解説を行っている。構成としては、病名、その病気の病状、可能な病因、内治である薬物療法（水薬、油薬、膏薬）、外治である焼金、ランセッタなどによる排膿、口明、切取等を書き記している。以下に病名を記す（原文はカタカナで表示されている、カッコ内は大介の説明）。

ヒボウネス エン ハロテエテス（梅毒によっておこる腫物）、カルホンキリイ（首胸腕脚等に多発する腫物）、ヒユホウネス ヘエネスホイレン（腫物で両内股両腋下で。婦人帯下の後に此腫を多発する）、ヘルニョウネス（凍傷）、ヘエテヒユル（熱壊脱疽）、コウトヒユル（寒壊脱疽）、テエリンキ（労症）、ロンゴシユクト（肺病）、シキウルホイコ、アンヒユスシヨウ、コンビスシヨウ（火傷）、シユリス（腫瘍）、クヌウストゲスウエレン、カルシノマ カンケル（癌）、ヲエテエマ、ワアテルケズウユルシン（水腫）、ウエキライト（筋肉、骨等に出る腫物）、センテング テルゲウリキテン、ヒステラア ハイフスウエレン、ヘエニススウエレン、ユルセラア カロサ、フルヲウデルテサ、スウエレン

これらの記述を見ると、和蘭語の外科書が吉雄家にあり、その一部が翻訳され、講義されたと考えられる。吉雄家の蔵書目録から、ローレンツ ハイスター（一六八三年～一七五八年）の“*Instituitones Chirurgicae*”の可能性が高いので現在検討を行っている。これは、後に大槻玄沢らによって翻訳された『瘍醫新書』であり、その関連についても報告する。